

● 人生詩集 ●

(1) 多谷昇太

「みなと」

港だ、夜の。

風が頬に冷たい。

停泊中の船の灯りが美しい。

波に照り映えてゆらゆら揺れるその様は

海に金色の帯をながしたようだ。

遠くからウインチの音が聞えてくる。

人夫たちのかけ声も。

さても今

港は眠っている。

波の揺り籠にゆられ、夜の闇に包まれて。

俺も帰って寝ることとしよう。

波の音がいかに心地よくとも

潮の香がいかに芳しくとも

今は帰ることとしよう。

港よ、お前もそのまま眠り続けるがいい、

静かに：

だがもし、

太陽が天空の真ん真ん中に来、

人々が薄地の服を纏うようになったら

港よ、甦れ！

すべての活気を取り戻せ！

その時俺は行く。

聖なる都パリへ、フランスへ。ランボーとなつて！

「波」

何を悩むことがあるう、何を苦しむことがあるう。

お聞き、哀しき者よ。

いつの世にもお前と同じ様な若者がいた。

毎夜海辺に来てはその者は私に問うた。

教えてくれ、海よ。人生の意義を。

与えてくれ、生き甲斐を。

俺は絶望し、傷つきながらもひたすら生きて来た。

真理を得んがために！

ああ、だが人は死なねばならぬ。

生とは何だ？死とは？人間とは？

神は存在するのか？海よ！

「流れ星」(一)

ああ、

アポロンの放つ銀矢のように

目にも止まらぬ速さで、光となって

私は下界に墜ちて行かねばなりません。

悲しや、

どんなにこの身を厭おうとも、慈しもうとも

一瞬のうちに私は、光となって消え行くのです。

サッフオーよ、私を讃えてください。

その優雅な堅琴の調べで私を謳い、憐れんでください。

森のニンフたちよ、でき得るならば

光となった私を、

あなたがたの透き通る衣のうちに織り込んでください。

ああ、

誰が私を見てくれるのでしょうか？

こんなに美しいのに、

どうして墜ちて行かねばならないのでしょうか？…

哀しき者よ、私は

寄せては返し、寄せては返す。

寄せては返し、寄せては返す。

未来永劫、同じ業を繰り返すのだ。

むかし同じことを問うた若者も、生きて、老いて、

今は私の中にいる。

この波の音にその者の声が聞こえないか？

今のお前の声と重ならないか？…

さばかりの戯れ事、痴れ事と

波の音に聞くまでは

尽きぬ迷いに流離うがいい。

所詮お前も大海の一滴、

私はお前、お前は私なのだ。

哀しき者よ、私は

寄せては返し、寄せては返す。

寄せては返し、寄せては返す。



「虹かける心」

雨あがりの広っぱ

あっちこっちに水たまりができて

その上をトンボが

ときどき水面に尻をつけながら

楽しそうにとんでいる

その水面にさざ波をたてて

さわやかな風が 少年のほおをなでて行く

見あげれば雲のすきまから

いくすじもの光が地上にさして

おおきな虹の橋を空につくった

「わあ」とおおきな声をあげて少年はよろこんだ

こんなきれいなそら、ぼくは：

学校のひけた午後の工場まち

とおくの大工場で仕事再会のサイレンがなり

いつときやんでいた騒音が

雨あがりの空気をつたって

あたりに震動をひびかせはじめた

たちのぼる鉄と機械のにおい

工場まちの午後のはじまりだ

しかし広っぱは 少年のこころをまだひろげていた

空気がとってもおいしくって きもちよくって

まるで別世界にいるようだった

はいいろの工場まちに住む少年にとって

このひとときは この広っぱは

神さまからいただいた 宝石のようなひととき

ゆめの世界

少年はどこか遠くの国 本で読んだだけの

見知らぬ外国のまちにおもいをはせた

見あげれば数羽のハトが

光のすじをよぎって 虹のかけ橋をこえて

南のそらをさして飛んでいった

いききたいな ぼくも：

そんな少年をからかうように

またハトといっしょに飛んでいきそうな

少年のこころを よびもどすかのよう

足もとでトンボが

クルクルと輪をかいて

水平飛行をしてみせた：



「雪の蝶」

窓の外には雪が舞っている  
その雪片ひとつひとつが白い蝶のよう  
あるものはゆっくりと下に落ちて行き  
あるものはひらひらと上へ舞い上って行く

教室では級友らが皆

先生の言に聞き入っている

ぼくは…というと 何を聞くでもなく

ただぼんやりと 机の上を眺めたり

窓の外の 雪の静けさを 聞いているだけ

そして級友である(?) 廻りの超人たちを

何の感情もなしに ただ意識しているだけ

皆と僕とは 毛筋一本ほどの関係もない

蝶たちが微笑みながら中を覗いて しかし僕を見ると

今度は黙って

みんなよそへ離れてった…

「ミルク色の雨」

ミルク色の雨が降っている  
美味しそうな雨だが

しかしザアザアと粗雑に降っている

もつときめ細かに降るなら

俺はきつとべろつと舌を出して

その何とも云えぬ嬉しいものを

夢中になって飲んでいたに違いない

だって俺は気が狂いかかってるし

そんな雨は 心を静謐に 平和裡に戻す

亡き母のようであるからだ

狂気をしのに戻す 天の妙薬とも思えるからだ

それなのに何というこの降りよう

こんな雨はいくら飲んでも 腹はくちくなりはいしない

こんな粗雑な、雨！…



「空虚<sup>うつつ</sup>」

実に静かだ

シーンとしている

葉っぱの殆ど落ちた木々が

黙って僕を見つめている

あたりには無機質な日の光が射している

時折り風が 数少ない木の葉をサワサワさせている

あとは何も聞こえない

目の前の木に蜘蛛が一匹巣を張っている

それさえ何かもの悲しい

一匹きりなのだから

おや？ 殆ど枯葉のような木の葉が 僕に何か云ってる

「よく来てくれましたね」って そう云っている

不登校してやって来た お前と同類の この俺に。

空虚で、(だから) 実に素敵な、ある晩秋の午後の日…

更に山の奥に分け入ると 金網があつて

立ち入り禁止の立て看板

コーション！ ここより南多摩米軍射撃場！

だそうだ。

「ソナチネ」

パリーの香り シャンソンの味

何となく…(感じる)

生きているという この小さな喜び

シャンデリアの細い蠟燭のもと

私の小さな幸福が…ゆれる

(家出。横浜中華街の店で住み込みで働く。渡欧を期していたが、実はその店での充実した日々こそ、幸福だったと、全く気づかなかつた。シャンデリアは素敵なお店の内装品…)

